
Lost Memories～失われし記憶～

銀 煌輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost Memories（失われし記憶）

【Nコード】

N9026R

【作者名】

銀 煌輝

【あらすじ】

独自で作ったファンタジーです。

主人公は記憶喪失という良くある感じの設定で本編が進んでいきます。

半人前の作品ですが、少しでも楽しんで頂ければ嬉しい限りです。

更新スピードは遅く、更に加えて不定期になると思います。

なるべく頑張りますが、予めご了承ください。

主人公クロードはとある国の將軍。しかし、ある夜謎の人物の襲撃に遭い、目が覚めたら見知らぬ土地にいた。持っていたのはある程度の知識と一振りの魔劍のみ。

今、彼の記憶探しの旅が始まる！！

始まり（前書き）

初作品です。

是非よろしくお願いします。

始まり

太古、世界を脅かした魔手。しかし、それは勇敢な幾人もの戦士達の手により無事封印された。

悠久の時間が流れ、かつての戦士達は『神』として謳われるようになり、どこからかこの地に現れた人間達によってあくまで「伝説として」語り継がれていった。

更に時間が経つと、人間達は魔術を駆使して飛躍的に発展し、程なくして大きな文明が起こる。

しかし、それと同時に古からの勇者達の伝承は、人々の記憶から消え去りつつあった。

そして――

始まり（後書き）

予感

今、薄暗い宮殿の廊下を一人の男が歩いている。男は不機嫌なのだろうか、少しだけ歩調が早い。

おそらく二十歳くらいであろう彼は、外見の印象がかなり強い。まず目につくのが赤い髪。そして今は迫力を増している、鋭い緑光を宿した瞳などがそうだ。

辺りが暗いことと、ゆったりとした黒マントを纏っているため服装は不明確だが、帯剣していることは分かる。

そんな彼の名は「クロード・ヴェルクス」。この国の一將軍だ。

彼はお世辞にも真面目とは言えない性格だが、民からの信頼はかなり厚い。

その理由は2つある。

1つ目は彼の部隊は戦で必ず毎回大きな戦功を上げることだ。彼がこの將軍の地位にいるのも積み重ねてきた武勲や知略に秀でていることなど、様々な功績のためだ。

そしてもう1つの理由、それは王にある。

即位して日が浅い現王は『超』が3つはつく力不足（クロード達は無能と呼ぶ）なため、將軍達は王がするべき仕事の一部を担っている。

彼らが今でもこの国を見捨てていないのは先王のおかげだ。彼らがここに残っているのは、先王の厚い信頼を受けていて、今もなお忠誠心を失っていないからだ。だから彼らは王というよりは国に仕えているのだ。

つい先日もある出来事が起こった。

大国である隣国がこの国に侵攻してきたのだ。牽制のつもりだっ

たのか、攻撃されはしなかったが、例の無能は文字通り震え上がり、一兵卒までもが呆れたものだ。

攻撃されたのならともかく、まだ何の被害も受けていないのに。王の心中を鏡に映したかのように国内も少し慌ただしい。逃げ出す民が少ないながらもいるようだ。

クロードが不機嫌な理由はまさにここにある。無能はこの混乱を鎮めることができず、將軍達は幾度となく王の職務に駆り出されている。

今もその政務を追えたところだ。

そして今、彼は自室に戻る最中なのである。何か美味しいものでも食べて寝るか、などと思いつつ。

…と、背中に悪寒のようなものが突き抜け、彼は立ち止まった。

（これは…、殺気？）

自然と手が背中の中へ伸びる。いつでも抜剣できる体制になった。

廊下に設置されていた蝋燭の炎が一瞬揺らめき、全て消えた。

周りを見回すが、目に入るのはただ一色のみ。漆黒の闇に包まれたこの場所にやがて一筋の月光が差し込んだ。

そして、来た。

襲撃、そして…

クロードは咄嗟のことながらも冷静さを失わず、後方へ飛び退き身構える。その動作の中で剣を抜くことも忘れない。

警戒態勢を保ったまま、少しの時間が経った。来ない。

クロードは、攻撃を仕掛けて来ない敵に苛立ち始め、叱咤する。

「誰だか知らないが、いるのは分かっている。出て来いよ、正々堂々と勝負だ！」

しかし返事は無く、沈黙が場を支配。

平静に戻ったクロードは、一向に現れない敵を挑発。

「おいおい、もしかして俺と闘うのが恐いのか？」

すると、極めて冷静な声が返ってきた。

「私なら、先程からここにいますが？」

言葉と同時にクロードの前方の空間が歪み、中から一人の男が現れる。

（口調は穏やかだが、挑発に乗ってきたな）

男は全身黒一色という格好で、フードを被り顔を隠している。ただ1ヶ所見えている口元は軽く綻んでいる。

クロードが戦闘体勢に入ると、にわかに剣が光り出す。うっすらと銀に煌めく剣にはいつも見入ってしまう。これは先王から賜りし魔剣である。

クロードはこの剣と共にいくつもの戦場をくぐり抜けてきた。まさに相棒と呼ぶに相応しい剣だ。

男に剣を向け、静かに問う。

「何者だ？ 目的は明白だがな」

すると、男は更に口元を弛めた。

「流石はクロード將軍、話が早い。透明化の魔法にも驚いてませんし、私は今驚嘆していますよ」

先程と変わらない声音で答える男。

（質問に答えない、か。だったらこっちから言ってやる）

「おい、お前は間諜だろう？」

男は黙したまま答えない。

（やはり答えないか。まあ、当たり前か）

そうクロードが思っているところに、

「正解ですが、私は間諜ではありませんよ」との答え。

（正解なのか、それは？）

疑問に思いつつも、クロードは更に質問を重ねる。

「なら、やはり暗殺者か」

質問というより、もう断定の口調である。

男は「まあそんなところです」と軽く肯定。そして、

「貴方は聡明だ。しかし、もう終わりにしたいので、最後に一つ。

貴方達の王は此方へ着きました。ですが、貴方を味方にすることは無理なようです。ではっ！！」

これを最後に走り出す男。その手にはいつの間にか短剣が。

クロードは、繰り出された男の攻撃を難なく受け止めるが、男は素早く軌道を変え、次の斬撃を送ってくる。

すっかり防御に回ってしまったクロードは、相手の速さにより攻撃に転じられない。

「どうしました？ 反撃しないのですか？ 防戦一方では勝てませんよ？」

男はいとも容易く斬撃を叩き込んでくる。その動きからは全く疲れの色は見えない。

クロードも今はまだ平気だが、防ぐにも限界というものがある。

（何なんだ、コイツは？ 化け物かよっ！？）

クロードは歯を食いしばり、一撃一撃を耐え忍ぶ。

時々反撃をするも、その全てが簡単に避けられてしまう。

そして、クロードの体力もそろそろ限界に。対して男は息一つ程しか乱していない。

クロードは国内でもトップクラスの実力者なのだが、この男はその彼をも凌ぐ力を持っている。

そして、男の攻撃を大きく弾き返したのを最後に、クロードの手は止まった。

（くっ、これで…終わりなのか…？）

焦るクロード、何か手を考えるが思いつかない。

「少々手こずりましたが任務は遂行できました。残念でしたね、貴方は謎の失踪を遂げたことになるでしょう」

もうシナリオは出来上がっているらしい。どうにかできないものか…

男が短剣を振り上げ、絶体絶命の窮地に陥ったその時、クロードの魔剣が突如目映い光を放った。

「！？ …これはっ！！」

剣から強い魔力を感じ取ったクロードの口から謎の言葉が流れ出る。

視界全てが光で覆われ、それが収束した後、廊下にはただ一人だけが立っていた。

その顔には驚きがありありと浮かんでいる。

「まさか…しくじっただど！？ くそっ、なかなかやるな、クロード…」

軽く舌打ちをして男は姿を消す。

廊下には何の痕跡も残らず、激戦があったことは分らない。

光り輝く月明かりの下、今日この宮殿から將軍が跡形もなく消えたことに「気付いた」ものは皆無だった。

見知らぬ地で part 1

目覚めて最初に見たものは、板張りの天井だった。

「ここは…？ 痛っ！」

ベッドから身を起こした彼は、頭の痛みに呻き、再びベッドに沈む。そのため、首だけを巡らし辺りを見やる。

机や椅子に筆筒や棚といった、生活を営むための最低限の道具しか置かれていない。この家主は無駄を嫌う性格なのだろうか。

——そして、ふと思った。

（俺は…、誰だ？）

知識はあるが、記憶が無い。ただ、空虚な闇、『虚無』が広がっているのみである。

と、その時彼の目に立て掛けられた一振りの剣が留まった。

自分のことなど忘れて立ち上がり、吸い寄せられるように剣へと向かう。不思議なことに頭の痛みは感じなかった。

鞘を手に取り、剣を抜く。剣は心地良い音を立て、滑らかに抜けた。

刀身はうっすらと銀光を放っていて、神秘的な美しさを持っている。見入ること数秒、我に返り剣を収める。

元の場所に戻そうとして剣を下向きに持ち替えると、そこに小さく文字が彫られていることに気付いた。

読むと、『Clord Vels』と彫られている。勿論知らない名前だが、どこか引っ掛かる。

が、考えても埒が明かないので、剣を戻す。

静けさが場を支配。

彼は何をしようか考えるが、何も浮かばないので諦めてベッドへ眠りにつく。

気が付くと、彼は暗闇の中にいた。
彼には、それが永遠に感じられた。
と、遙か遠くに点が見えた。

おそらく、光が。

但し、一瞬だけ。

儚く揺らぎつつ。

それが何度か繰り返され、

やがて――

「今のは…、夢か？」

彼は跳ね起き、呆けたように呟く。

やけに意味深い夢を思い起こす。

（あれは、俺の失くした記憶の手掛かりなのだろうか）

思案した彼は、とりあえずこの部屋を出ることに。扉に向かって歩く。

ノブに手を伸ばそうとしたその時、突如扉が迫ってきた。

「何っ!？」

危険を感じ跳び退こうとするが、時既に遅し。

声を上げる間も無く顔面に。

彼は本日3度目の眠りについた。

――数分後、彼は意識を取り戻した。顔にはまだ痺れが残っており、不快である。

傍には男が立っていて、少し不安そうにこちらを見ている。

「大丈夫か？ …って、俺のせいなんだが…」

男は40くらいで、短めの茶色い髪に、同色の眼に髭。そして、おそらくは何かの作業着であろう、色褪せた青（水色）と言い難い）の上下という姿。

今はすまなそうな顔をしているが、気さくな性格そうだ。

「ああ、平気だ。気にしてない」

そう言うと、男は嬉しそうな顔に早変わり。

「そうか、良かった！！　だが、何故あんな場所にいたんだ？」

男の質問に、冷静に答える。

「すまない。どうやら俺には記憶が無いようだ。悪いが、ここは？」

「言っても分からんかもしれないが、ここはメイファ国のフレイグという町だ。そして、俺はガイン・アルベリー。この町で鍛冶屋を営んでいる。あ、俺を呼ぶ時は呼び捨てで構わないからな。えっと…、名前も分からないのか？」

「そうだが…、それが何か？」

疑問に思いつつも彼は答える。

「きつと、お前の名前は『クロード』だろう。クロード・ヴェルクス。とりあえず、そう名乗ってれば良いんじゃないか？」

(クロード・ヴェルクスって、あの剣の…　ってことは…)

彼が思案しているところにガインが一言。

「ところで、剣を見たか？　あれはお前が持っていたものだぞ？」

「…そうか。じゃあ、やはりあれは俺の…？」

彼は少し考えてから呟く。更に一拍置き、ガインに向く。

「ありがとう、ひとまずそう名乗ることにする」

そして彼―クロードは思い出したようにガインに尋ねる。

「そう言えば、俺はどうやって助けられたんだ？　『あんなところ』って言ってたが…」

すると、ガインも思い出したような顔をし、そうだなと呟き語り出す。

見知らぬ地で part 2

あれは今朝のことだ。鍛冶屋の俺は近くの山まで鉱石を採りに行つたんだ。その行く道の途中でお前を見つけた。

あの時は驚いた。こんな人気の無い所に人が倒れているなんて、思いもしてなかったから。

それで俺は鉱石を諦めて、お前を背負って帰って来たんだ。力には自信があるからな。鉱石採りはまた行けば良いしな。

「簡単に言うところなところだ」

「そう言い終え、口を閉じる。」

「そうだったのか、ありがとう。何か手伝えることがあったら言ってくれ。一部を除いて協力するぜ」

ガインはクロードの言う『一部』が気になったが、そこは訊かないことにした。

「そうか？　じゃあ…、鉱石集めを手伝ってもらおう。俺も行くから何も案ずることはない」

「分かった。ところで、今は何時頃だか分かるか？」

お腹が空いたクロードは、ガインに時間を尋ねる。

「今はだいたい昼時だ。今から飯だが…、どうだ？」

空腹のクロードを氣遣ってか、ガインは彼を食事に誘う。

クロードは願ってもない機会、とばかりにその話に食いつく。

「ありがたく甘えさせていただこう！」

「よし、ちよつと待ってろ。すぐに用意する」

「意外とうまい！！」

数分後、2人はテーブルに着いていた。

「意外と、は余計だ！　ほぼ毎食自分で作ってるんだからな」

スープに感心(?)するクロードと、それに抗議するガイン。
暫しの沈黙の後、ガインが口を開く。

「鉱石の件だが、明日で良いか？ 急で悪いが、都合上明日が一番なんだ」

そう言って口を閉じたが、すぐに断りを入れる。

「あ、無理に気遣う必要はないからな」

「いや、俺も特にすることがなくて暇を持て余していたところだ」
クロードは快く了承。

「ありがたい、よろしく頼むぜ！ それと、途中の道には魔物が出ることもあるから心に留めておいてくれ」

ガインは満足げに頷き、笑みを広げる。

「へー。魔物って、例えばどんな種類が出るんだ？」

魔物について好奇心をぶつけるクロード。

ガインは口元を緩ませて『いかにもクロードらしい』と感じた。
会って間もない2人だが、かなり打ち解けつつあった。

「そうだな…、良く見かけるのはゾンビやスケルトン、スライムぐらいだな。あとはハウンドとか…、って説明が必要か？」

クロードはガインを見据え、力強く断言。

「大丈夫だ。スライムはゼリー状の不定形生物で、ゾンビは動く屍人、スケルトンは戦死した兵士の骸に邪念が宿ったもの、ハウンドは凶暴化した猟犬、ってところだろう」

ガインはクロードの知識に感心、同時に彼の心にはある一つの目標が生まれた。

それは勿論――

「あっ!!」

突如クロードが大声をあげた。

「な、何だよ。びっくりしたじゃねえか！」

よほど驚いたのか、ガインは少し身を引いている。

「いつの間にか俺のスープが減っている!!」

本当に空腹だったのだろう、食べ物への執着が少し高いようだ。

その言葉に、ガインは呆れながら告げる。

「何言ってるんだ？ お前は話している間もずっと食い続けてたじゃないか。だが心配するな、余分に残っているぜ」

クロードは顔にも声にも嬉しさを表す。

「おお、天恵が！！」

ガインはまたしても呆れ、突っ込む。

「神にじゃなくて俺にだろ、感謝すべきは。残りは向こうにある、自分でよそってくれ」

キッチンの方を指差す。すると、彼は残りを素早く平らげ、滑るようにして行ってしまった。

向こうの方から感謝の声。

ガインは小さく笑いを漏らす。

見知らぬ地で part 3 (前書き)

2日連続でパソコンを開けたので、頑張ってみました。

見知らぬ地で part 3

「：さてと、もう充分か？」

食べ終わった頃合いを見て、クロードに声を掛けるガイン。

「ああ、ごちそうさま。それで、何だ？」

「ちょっと訊きたいんだが、良いか？」

クロードはガインの要望に頷く。

「記憶が無いのは分かったが、身体面はどうだ？ 例えば剣は上手く扱えるか？」

魔物討伐のことを案じてなのか、それともただの興味本位なのか、ガインが訊いてくる。

「そうだなあ：、扱えるとは思いますが、上手く言うかどうかなあ：何しろ記憶が無いから：」

「いや、大丈夫だと思うぞ」

訝しげに答えるクロードと、自信たっぷりに即答するガイン。だったら、何故質問のか少し疑問だ。クロードが根拠を尋ねると、一言「剣だ！」とまたしても自信満々の様子で言った。

沈黙：

「え：：？ それだけ？」

数秒の後、クロードが聞き返す。

「ん？ じゃあ——」

今度はとてつもなく長くなりそうな説明をクロードは慌てて遮る。

「簡潔に、そして分かりやすく頼む」

ガインは軽く唸ってから話し出す。

「：その剣は、かなりの代物なんだ。なにしろ鍛冶屋の俺でさえも知らない金属が使われているからな。そんな剣の持ち主だ、その腕前が鈍い訳はないだろ？ ま、全てが俺の勝手な推測にすぎないけどな」「へー、俺の剣はそんなに凄い剣だったのか」

クロードは驚きつつも、簡単にその事実を受け入れたようだ。

「あ、因みにその剣には魔力でコーティングがしてあった。これもまた貴重で珍しいことだ。あと、その剣を少し鍛えさせてもらった。今回は上手くいったぜ」

ガインは笑みをこちらに向けるが、クロードはとても笑えなかった。

「おお、悪いなあ、そんなことまでしてもらって」

口ではそう返すが、クロードは内心ほっとしていた。

（何だよ、今回『は』って！？ 良かった、上手くいった）

技術が無いのか、言語の構成能力が無いのか、それとも今回はたまたま間違えただけ（とは到底考えられないが）なのか、彼の言葉にはこれからも惑わされるかもしれない。

「ところで、この後はどうするんだ？ この町でも見て回るか？」

話を変えて、町の散策を提案するガイン。

「あゝ、そうだな。暇だし、行ってみるか」

と、いう訳で昼食後はまずこの町をぶらぶらと歩いてみることにした。鉱石採りは予定通り明日の朝、昼食を持っていくことにした。意外と時間が掛かるようで、丸1日使うらしい。

この鍛冶屋兼ガイン宅は町の東部の中央部にあるやそうこしいだ。この町は国の首都にそれなりに近い、ということもあってなかなか発展しているようだ。道も整備されているし、店もかなり品揃えが豊富で、人口もそこそこある（ガイン談）。

だから、この町は割と広い。端から端まで歩くとガインの足で20分くらいかかるという。そして、町の主な構成は中央部は店と住宅地、西部及び東部は住宅と、田畑などがちらほらあるようだ。

クロードは中央部にある店を見て回ることにした。但し、特に何も買うつもりはないので、持ち物は剣だけにした。

「じゃあ、行ってくる。いつ戻ってくるかは分からないが、そんなに遅くはならないと思う」

クロードは出掛けるにあたってガインにそう告げる。

「ああ、分かった。もしかしたら俺も出掛けているかもしれない。明日の準備をしないといけないからな。一応、鍵を渡しておこう」

「じゃあ、よろしく」

ガインの言葉にクロードは軽く手を上げ、中央部へと向かう。

見知らぬ地で part 3 (後書き)

なんか、みなさんの小説には後書きが付いているようですね。
俺も何か書こうかな

…と、いうことで今回の後書きはこれで終わり(！?)です。
笑いを取るセンスとか無いし…

次回も是非よろしく願いますm (_ _) m

見知らぬ地で part 4

外に出た途端、冷たい風が吹いた。顔をしかめてマントを羽織る。5分ちよつと歩くと、中央部にたどり着いた。と、言っても、明確に区切られている訳ではない。店が増えてきたので、そう判断しただけだ。

武器屋や防具屋、魔法屋に情報屋など様々ある。教会や広場など、公共の場所もあり、路上では占いなども行われており、人通りも多い。クロードは活気のある中央部を見て回る。

背中の剣もそこまで珍しくはないようで、帯剣している者も数は少ないながらも確認できた。

だが、その中でもクロードは一際目立っていた。赤髪に深緑の目。クロードの見る限り、このように目立つ者は誰もいない。声こそ掛けられないものの、皆横目で彼を見る。

中央部も充分見て回ったので、もう帰ることにした。周囲の目が気になる、という理由もあるが。「ここ、どこだ…」

溜め息混じりに呟くクロード。彼は帰路の途中に道に迷ってしまった。とりあえず東に向かって進んでみる。

少し歩くと、狭めの広場に出た。誰もいない。どうやらクロードは人通りの少ない場所に迷い込んでしまったようだ。

ちやうど広場の中ほどに進むと、クロードの目の前に、いやクロードを囲むようにして、10人程の男たちがばらばらと現れた。

ほとんどの者が粗末な服を着て、体格が良く、棍棒や斧などの武器を持っている。

実はこの集団、警備隊も手を焼くほど（人の見えるところでは犯罪を犯さないから逮捕できない）のならず者なのだが、クロードには知る由もない。

「有り金を全て置いていけ」

リーダー格の30後半くらいの男が一步前へ出、しわがれ気味の声で言う。

「そうすれば、何もしないのか？」

クロードが後を続けて問う。

「そうだ、金さえ出せばお前に用はないからな」

そう答えて、嫌な笑いを浮かべるリーダー格。

それに対してクロードも負けないほどの笑みを浮かべる。

「そうか。じゃあ、これで通してくれるよな？」

そう言っただけ何も無かったかのように歩きだそうとするが、勿論男たちに止められる。

「おいおい、何の真似だ？」

別の男が苛立ちを含めた声で訊く。

「そう怒るなよ。俺はただ有り金全てを置いたんだ。無一文なんだよ、俺は」

冷静に、淡々と答えるクロード。

「ふざけるな！ 調子に乗りやがって！！」

とうとうリーダー格が切れた。顔が真っ赤になっている。まあ当たり前前の反応だろうが。

（調子に乗ってるのはおまえらだろうが。あゝ、面倒なことに巻き込まれたなあ）

そんなことを思いつつ、頭を掻く。

「お前ら、痛みつけてやれ！！」

典型的な台詞を吐き、その言葉に応えた男達が怒濤の勢いで迫ってくる。

勿論、黙ってやられるクロードではない。剣が入った鞘を手にし、臨戦態勢に。

男達の力任せの攻撃を軽々と避け、時には流れるように受け流す。酷くても掠る程度で済んだ。

腹に、首に、他にも様々なところに拳を、鞘を叩き込んで気絶・昏倒させる。残すはリーダー格のみだ。しかし、既にその姿はかな

り遠ざかっていた。今から追っても追いつくのは不可能だろう。

「ちくしょう、逃げられたか…」

どちらが悪者なのか分からない台詞を言う。

そして、足下の男達を見て呟いた。

「俺も逃げないとな」

今この状況を見られたらほぼ間違いなく誤解を招くことになるだろう。

そして、クロードも遁走した。何人かの転がってる男達を残して。

見知らぬ地で part 4 (後書き)

今回も無事(?)書き終えることができました。

この辺はまだプロログのようなもので、なるべく早くメインまで持って行きたい、と思っております。

でも…、物語を作るって難しいですね…

暇をみて書きためておきたいものです。

では、次回もよろしく願います！

見知らぬ地で part 5

「やっと着いた……」

クロードはどうか自力でガインの家まで辿り着いた。風貌のことをあれこれ訊かれたら面倒なので町民には訊かなかったのだ。

「帰ったぜ！」

扉を開くなり言ったクロードだが、返答は無し。ガインはどこかに出掛けてしまっているようだ。

……鍵も掛けられていない。

（それにしてもさっきの奴らは何なんだ？ ……まったく、身なりのせいで何か誤解されたのか？）

そして彼はまた眠ることにした。先刻の喧騒で疲れたためだ。

何度も寝ているはずなのにすぐに眠りにつけた。記憶を失ったことも1つの原因かもしれない。

彼は再度暗闇にいた。

この世の全てを覆うかのような暗闇に。

と、彼の眼前に淡い光が灯った。

その光は上下に揺らめいている。

彼はそれに手を伸ばすが掴めない。

それは何度やっても同じだった。

そして――

クロードは身体を横たえたまま目を覚ました。上体を起こしベッドの上で考え込む。

（不思議な夢だな。さっき見たものと良く似ている。誰かが何かを伝えたいのだろうか）

先刻の夢と併せて考えると、とても偶然とは思えない。クロード

に知る術は無いが、絶対に関わりがあるはずだという確信を持った。そろそろガインが帰ってきているかと思いい部屋を出てみたが、まだ帰ってきていないようだった。

またしてもやる事が無いクロードは部屋に引き返し、剣を良く見てみることにした。

傍にある鞘を手にとりゆっくりと抜く。刀身が見えてくるにつれ、淡い銀光が輝きを増していく。

すると先程とは異なることが起こった。

何と、刀身が少しではあるが伸びたのだ。更に剣にはほとんど重さを感じない。とても扱い易そうだ。

と、不意に何者かの声が聞こえた。いや、頭に響いてきた。

《記憶を失ったようだな、主よ。だが、これまで通り力になろう》
低く重い男の声だ。当然、クロードの周りには誰もいない。

と言うことは――

「まさかこの剣か!？」

あまりの出来事に驚き、声を上げるクロード。

《如何にも。そして、一つ忠告をしておく。記憶が戻るまで我を使うときは本当に必要な時のみに限定すること。それ以外は他の剣を使うように。さもなくば主に災いが降りかかるであろう:》

そして、何かが遠ざかる感じがした。剣に話し掛けるが返答はない。

なので心で話し掛ける。

これからよろしく頼む、と。

しっかりと伝わっているであろうことを信じて。

見知らぬ地で p a r t 5 (後書き)

次で第1章は完結です！

見知らぬ地で part 6 (前書き)

おかげさまで500アクセス、読者は100人を超えたようです。
ありがとうございます！

見知らぬ地で part 6

ガインは空が赤みを帯び始めた頃帰って来た。明日の道具を揃えてくれたのだという。

慣れているのだろう、必要最低限のものしかない（ように見える）。この位なら大した重さにはならないはずだ。

「ま、こんなもんだろう」

ガインは荷物を纏めながら、明日の予定について（というほど大袈裟ではないが）話し始める。

「明日は朝食後にここを発つ。そうすれば昼には目的地に着き、そして遅くとも夕方には帰ってこれる。帰りは鉱石の分で少し重くなると思うがまあ大丈夫だろう」

「ああ、俺は別に何でも構わないさ」

ガインは満足気に頷いて、クロードが待ちわびた言葉を。

「よしっ、それじゃあ飯にするか！」

「おうっ！！」

夕食後、クロードは聞きたかった質問を口にした。

「そういえば、俺はさっきあの剣と話したんだがどう思う？」

「何だって！？ 特別な剣だとは思っていたが、まさかそんなことが… その剣はお前に何を言ったんだ？」

ガインは声が少し上ずっている。余程驚いたのだろう。

「力になるってことと、あまり自分を使うなって…」

間を開けずに答えるクロード。

「じゃあ夢だった、という可能性は？」

質問を重ねるガイン。

「完全否定はできないが、おそらく現実だ」

クロードも淡々と質問に答える。そして、剣との会話内容をガインに言ったあと、続ける。

「そこで、剣を一振り欲しいんだが…」

急な要望にもガインは快く応えてくれた。

「ああ、分かった。今持つてくるからちょっと待ってな。俺が手掛けた中で1・2を争う出来の剣だ。それと、言い忘れてたんだが、お前が倒れていたところに袋が落ちていた。中身は見えていない」

そう言っただけでガインは部屋を探り始めた。そして、小さい麻袋を持つてきた。

「ほら、これだ。あとは剣だな」

袋を渡すと、ガインは作業場へと入っていった。

クロードは袋を開けてみた。そこには小さいが光り輝く十数個の色とりどりの宝石が入っていた。

「おお…」

クロードの口から嘆息が洩れる。

そこへガインが戻ってきた。手に持っているのは剣だけではない。

「これが俺の最高級の剣だ。あと、ベルトはどうだ？」

ガインはいろいろと気遣ってくれているようだ。

「使わせてもらうよ、ありがとう」

ベルト（ガイン特製）は2本とも肩に掛ける仕様になっていた。

「そういえば、袋の中身は宝石だった。今までのお礼として1つ貰ってくれないか？」

「お、そうか…？　じゃあありがたく貰っておこう」

クロードは剣入りの鞆に2本のベルト、それに明日の荷物を受け取り、ガインに宝石を1つ渡した。

「さあ、明日は鉱石採集と魔物討伐だ。もう寝るんだな」

話を切り上げて部屋へ行こうとするガインをクロードが制止する。ある言葉にひっかかったためだ。

「魔物討伐って、そんなに頻繁に出現するのか？」

これに対してガインは、

「んー、そうでもないんだが、俺の戦士の勘がそう告げているような気がしなくもない」

と、曖昧な返事をする。というか、何だよ『戦士の勘』って…

「まあとにかくもう寝ろ。明日は早いぞ」

この言葉で打ち切りとなった。何だか上手く逃げられてしまった気がする。

自室に戻り、受け取ったものを置き、ベッドへ。あの剣を一度見てから横たわる。

とりあえず目先の心配事が消えたためか、瞼を閉じて少し時間が経過すると、彼は夢の世界へと旅立った。

夢の内容は、覚えてない。

見知らぬ地で part 6 (後書き)

以上で第1章は終わります。

第2章以降もどうぞよろしくお願いします！

遭遇 part 1 (前書き)

遅くなりました、すいません。

遭遇 part 1

クロードが目を開くと、朝の眩しい光が飛び込んできた。

「あゝ、良く寝たなあゝ」

目をこすりながら身体を起こす。

ベッドの反対側にある窓から燦々とした太陽の光が射し込んでくる。

「さて、行くか」

立ち上がり伸びをする。そして部屋を出るとテーブルに並んだ食事が目に入る。

――なんてことはなく、テーブルの上には空の皿が綺麗に配置されていた。今、朝食を作っているのだろうか。

世話になっているクロードは特に不満は抱かなかった。現に自分も起きたばかりだし。

そこへガインが入って来た。

「お、起きたか」

「ああ、ぐっすり眠れたぜ」

ガインは大方クロードの予想したことを言った。

「今から朝食の準備だから、そこにある食器をこっちに運んでくれ」
クロードは頷き、皿を纏め始める。何故広げられていたのかを疑問に思いつつ。

食べ終わったらすぐに出発し、1時間経たないうちに山の入口らしき場所に辿り着いた。

「さて、ここら辺から弱い魔物が出現し始めるはずだ。死にはしないだろうが、大怪我なんかはするなよな」

挑戦的な目つきでこちらを見るガイン。彼にとってこれはクロードの実力を計る目的もあるのかもしれない。

「俺だっておそらく戦士だ。動きとかは身体が覚えているはずだ。俺の強さに驚くなよ？」

同じ目つきでしっかりと見返すクロード。

「お、言ったな？ その言葉、死んでも忘れるなよ？」
死にはしないと言いつつこの台詞。

「見事に矛盾してるよ…」

あくまで例えとして言ったのだろうが、クロードは呆れて独白。

「ん？ どうした？ 早く行くぞ」

独り言とはいえ、聞こえるように言ったんだが…

ガインの声に急かされ、クロードは歩を進める。

最初の襲撃はすぐだった。

辺りに魔物の呻き声が響き始めた頃にはもう十数匹程に囲まれていた。

それに対するガインの行動は素早かった。

「俺はこっちを倒す。向こうは任せたぞ！」

手早く簡潔に指示を出し、槍を片手に走り出す。

「分かった！！」

その後、ふっと呟く。

「俺も頑張らないとな」

ガインの勇姿に闘争心を高められたクロードも魔物達へと向かう。軽く目を走らせて状況を把握する。ゾンビ3体にスケルトン2体、スライムが5匹だ。

動きの鈍いゾンビとスライムは後にして、スケルトンへと向かっていく。

その過程で剣を抜く。もちろん今回は普通の方だ。

スケルトンはどちらも剣を装備している。クロードは先に迫って来る左から迎え撃つ。

繰り出された突きを弾き、胴を薙ぐ。スケルトンはあっけなく骨を砕かれ、絶命。骨が硬く、手強い相手になるだろうと思っていた

クロードにとっては嬉しい誤算だ。

もう1体は袈裟斬りをしてきたが、それをのけ反ってかわし、逆袈裟を送る。

息つく間もなく今度はゾンビを相手にする。

掴みかかってきた両腕を切断し、流れるように首も。腐敗した異臭に顔をしかめつつ残りも一刀の下に斬り伏せる。

スライムは斬ったら分裂——なんてことはなく、容易く片付いた。長身のクロードには大きさを少し厄介があったくらいだ。

「ふう、終わったな。これで全てみたいだな」

ろくに息も切らずにクロードが訊く。

「ああ、今のところはな。どうだ、初の戦闘は？」

ガインも息一つ乱れていない。

「そうだな、余裕とまではいかないが、数だけだったようだ。個々の力は大したことなかった」

「そうか、良かった。じゃあ、先に進もうぜ」

クロードも頷き、2人は歩き出す。

後に起こることなど知る由もなく…

遭遇 part 1 (後書き)

やっと本編で戦闘描写ができました！

遭遇 part 2 (前書き)

遅くなりました！

まだあんまり推敲していませんが、投稿してしまいます (笑)
今度投稿できるのはいつになるか分からないので：

遭遇 part 2

それから何度かの交戦を経、目的地――すなわちこの山の頂上へ辿り着いた。

ただし、頂上と言っても標高は高くなく、開けてもいないので眺めが良いとは言えなかった。なので、2人は到着してすぐに鉱石を集め始めた。

「鉱石ってのは山の中から採掘するんだと思っていたが、違ったんだな」

鉱石を拾いながら、クロードが言う。

鉱石は比較的重く、赤みがかっていたりするので素人目にも識別は容易い。

「いや、合ってるさ。普通は地中で眠っているものだ。それに、この鉱石の質は高くない」

ガイン曰くこの岩石にはかなりの量、確率で金属成分が含まれているらしい。しかも、ここはあまり知られていないので、鉱石を横取りされる（その表現はどうかと思うが）ことも無いと言う。

ガインは他にも鉱石から金属成分を取り出すには錬成士に依頼しなければならぬこと、鉱石や金属は売っているが、（高いから）ほとんど買わないことなどを話してくれた。

「さて、こんなもので良いだろう」

話しているうちに決めていた量を集めていたようだ。そこまで多くは拾わないらしい。

太陽が頭上に昇っていた。ちょうど正午といったところか。

「終わりか。もう帰れるんだよね？」

クロードは荷物を背負いながら、ガインのもとへと行く。

「そうだ、もう帰れるぞ。じゃあ、戻るとするか」

2人は来た道を引き返していく。帰路の途中はガインがこの世界

のを中心にして話してくれた。

この大陸には約30の国があること、今は戦乱の時代にあるが、この国は大陸の東端にあり、更にここは辺境の地なので平和であること、ガインは昔他国に仕えていて、騎士大将だった（意外という顔をしたら殴られた）こと。いろいろな情報を知ることができた。

そんなとき、ガインがいきなり立ち止まった。

「どうした？ 何かあったのか？」

後ろからクロードが怪訝そうに尋ねる。

「さっき俺達が倒した魔物の死体が無い。これは警戒した方が良くかもしれない」

見れば、確かにここは先程魔物達を倒した場所だ。赤黒い染みがあるところどころに見受けられる。しかし、肝心の死肉や骨などはほとんど見当たらない。

「ただの獣かもしれないが、『ディヴァー』かもしれない。そいつは死体を食う大型魔獣だが、勿論生者にも襲いかかる。果たして2人で相手にできるか……」

ガインは誰ともなく語り出す。

「ディヴァーは紫の肌、緑の鬘を持ち、鋭い牙があり、足が速くて獰猛なんだ」

訊いてもいないのに特徴を話す。クロードのために教えてくれたのかもしれない。

そこで、2人は素早く山を下りることにした。気を引き締めつつ、歩調を早める。ガインはディヴァーは音に敏感なので注意するように、とも言った。

しかし、足音を殺して慎重かつ素早く下山する2人に邪魔が入った。

魔物が現れたのだ。進路も退路も塞がれているので、戦うしかない。

「くそっ！ 何でこんなときに……！」

ガインが焦りと怒りを露わにする。しかし、それはクロードも同

じだ。

「あっちを頼んだ。速攻でな！」

「分かった！」

ガインの指示でクロードは後方の敵を迎え撃つ。

なるべく音を発生させるのは避けたかったが、それを防ぐのは不可能だった。何故か、これまでの戦闘では楽に倒すことができた魔物の動きが機敏だ。

眼前のスケルトンを横薙ぎにしようとしたのだが、相手は剣を立てて斬撃を受け止めた。

「何っ！？」

少なからず動揺し、驚きが声になった。そしてその隙を突かれ、反撃をしてきた。

上段からの振り下ろしを膝をたわめつつ両手で受け、反動の力で弾き返す。そして、よろめく相手の胴を薙ぐ。

すると、スケルトンは呆気なく崩れ、骨の残骸と化した。耐久力は他のものと同じのようだ。

続いて他を相手にするが、あとの魔物は来る途中に遭遇した敵と同じくらいの強さで、悪くてかすり傷で済んだ。

そして、ガインの方へ振り返る。彼は何匹かの魔物達に囲まれて奮戦中だった。

クロードはガインを囲む敵のうち、一匹のスケルトンに背後から斬り掛かる。スケルトンは先程と同様に脆く、簡単に崩れ落ちた。

「終わったな。さあ、早く行くぞ」

瞬く間に群れを倒した彼らは、先を急ぐ。

遭遇 part 2 (後書き)

キリの悪い場面で切ってしまい、申し訳ありません…
今回は1ヶ月後までには投稿したいと考えております。
更新速度は遅いですが、見捨てないで下さいね。
まだキャラが2人しか登場していませんし…
それでは、次回もよろしくお願いしますっ！

遭遇 part 3 (前書き)

今回は強敵との戦闘です。

遭遇 part 3

下山しながらクロードはガインに話し掛ける。

「なあ、さっきの敵、なかなか強いヤツもいたよな」
それにはガインも同意する。

「そうだな。俺も槍を止められて驚いた。生前はなかなかの戦士だったのかもしれない」

「そうか、ガインですらもそうだっ——」

グギャアアアアア——！！

クロードの話を遮って、突如魔物の咆哮が響いた。

それは聞く者の恐怖を掻き立てるかのような威圧を帯びていた。

「なあ…、あれって、まさか…？」

クロードは逃げ出したい気持ちをなんとか抑え、ガインに尋ねる。
「ああ、例のディヴァーだ。だが俺が戦ったのよりは少し小さいな。俺達が戦ったヤツは3メートルくらいあったかな」

ガインに怯えは見受けられない。少しばかりは動揺しているようではあるが。

「だが、どうやってこんなのと——」

「来るぞ——！！」

ガインの鋭い叱声。

クロードも我に帰り、精神を研ぎ澄まして約2メートルもの巨駆の突進を避ける。

間一髪。危なかった。

そして、向きを変えつつあるディヴァーに向かって突きを繰り出す。弱そうな腹を狙って。

ディヴァーの痛みの叫び声が響く。今のはそれなりに効いたようだ。クロードの剣は狙い通り腹部に突き刺さった。刀身が半分程埋まっている。

ディヴァーが怒り暴れるので、止むを得ず剣を残して飛び退く。
ガインも奮闘しているが、あんなに大きい相手に1人では分が悪い。

と、なれば――

（使うしかない、よな）

背中越しに剣を見る。

《我を使うがいい。手助けしよう》

タイミング良く声来て、クロードは即決する。

「よしっ！　いくぜっ！！」

流れるような動作で抜剣、大きく跳んでディヴァーの目に斬りつける。一連の動作に無駄は無く、その過程で刺さったままの剣も抜き取る。

ディヴァーは噴き出す鮮血と失った左目の痛みや怒りなどで悲鳴を上げつつ、クロードに体当たりを仕掛ける。

それを見て跳び退るが、完全には避けきれず、衝撃を和らげるだけに留まった。少しの距離を吹っ飛び、地面に打ちつけられて一度跳ねる。

「ううっ…」

痛みに呻くクロードに、ディヴァーはとどめを刺そうと向かってくる。

なんとか立ち上がるが、とても攻撃を避ける余裕なんて無い。

（くっ、どうすればいいんだ…）

「俺の存在を忘れるなっ！！」

突然ガインが横からディヴァーを突く。大したダメージは与えられていないが、注意を引くには充分だった。

「すまない、助かった！」

「気にするな、お互い様だ！！」

痛みから立ち直ったクロードも攻撃に参加…しようとした時、剣に話し掛けられた。

《主よ、このままでは埒が明かぬ。魔法を使ったらどうだ？》

「魔法…、そうかその手が！　だが俺は…」

クロードは名案に思ったが、記憶喪失なので使えないことに気付く。

《案ずるな、頭では覚えてなくとも、心の内では覚えている筈だ。
我に続いてルーンを唱えよ》

剣に言われた通り頭の中で唱えられるルーンを復唱する。難しい
と思ったが、なるほど確かに覚えているようだ。

短いルーンを終え、叫ぶ。

「ガイン、避けるよ！　くらえっ、ファイア！！」

かざした左手に熱が集まり、小規模な火の玉となってディヴァー
へと向かっていく。ガインは射程圏外だ。

見事に命中し、大きな悲鳴が上がり、倒れる。黒く燻っている部
分もある。

ガインはそれでもなお立ち上がろうとするディヴァーに攻撃を仕
掛ける。少し遅れてクロードも続く。

「食らえっ！」

2人の攻撃を受けたディヴァーの断末魔が耳をつんざかんとする。
そしてディヴァーは横倒しになって少しもがいた後、動かなくな
った。

「ふう…、なんとか倒せたな」

ガインが安堵の表情を見せる。

「しかし、よく魔法なんて使えたなあ。俺はそっち方面はさっぱり
だ」

そう言って軽く笑うガイン。

「とは言っても、俺は剣の力で使っただけだ。記憶が戻れば自在に
使えるようになるかもしれないが、今はまだ厳しいな」

まだまだだ、とクロードは首を振る。

ガインが気分を改めるかのようにして手を叩く。

「さて、片付いたし、帰るか。日が暮れてしまう」
クロードも同意する。

「そうだな。じゃあ、帰ろう！」

遭遇 part 3 (後書き)

とうとうストックが尽きかけてしまいました：

次回は苦し紛れに人物紹介などに逃げるかもしれません（^| ^；）

遭遇 part 4 (前書き)

1000アクセスを超えました！
ありがとうございますっ！

遭遇 part 4

帰り道での何度かの交戦を経、町に着いたのは日が沈み始める頃となっていた。

ディヴァーとの戦いでかなり疲れたし、ほとんど歩きっぱなしだったので足も痛い。

——とは言っても、実際に歩いた距離はそこまで多くはないはずだ。度重なった戦闘が原因となっているのだろう。

「はあ、やっと帰ってこれたな」

夕暮れ時の町は、昼と比べると人通りも落ち着いている。

ガインの家も町の入口からあまり遠くはなかったので、わりと早く到着できた。

「よしっ、じゃあ俺は休むぜ！」

意気揚々と部屋へ向かおうとするクロードを、ガインが制止する。「休むのは剣の血糊を落としてからだ。そしたら剣を貸しな、鍛えておいてやる。まあ、魔法剣の方は下手にいじらないでおくが。ところで俺の剣はなあ、こうやって何度も鍛えて金属の質を高くするから、丈夫で切れ味もなかなかのものができるんだ。肉を斬り、骨まで裁つような剣が、な。まあ、お前の魔法剣と比べたら天と地の差がある、いや比べること自体が間違いか。それと剣には——」

延々と続きそうな話が本格的に深まる前にクロードは横槍を入れる。

「なあ、いつになったら終わるんだ？俺は早く休みたいんだが」

「おう、悪いな。じゃあ、拭き終えたらそこに置いていてくれ。明日には元通り以上だ」

口ではそう言うが、悪く思っている様子は皆無だ。むしろまだ物足りない、という感じだ。笑みさえも見受けられる。

語らせたなら、解放されるのはいつになることやら。流石は鍛冶屋、

といったところか。

「ああ、頼むよ」

布を受け取り、自室に入って作業を始める。意外にも時間がかかってしまった。

やっとのことで終え、剣を置くために部屋の外へ出ると、そこにはガインがいた。

「おう、終わったか。じゃあ、そこに置いといてくれ。休憩が終わったら鍛えておく。後は任せておけ」

「そうか？　じゃあ、すまないが俺は先に休ませてもらうぜ」
部屋の扉を開けながらガインに感謝し、中へ入っていく。

「今日はキツかったからしっかり休めよ」

ドアを後ろ手で閉めようとするクロードにガインが声を掛ける。
「分かった、そっちもほどほどにな」

閉じかけているドアの隙間からの応答を聞き、ガインは作業場へと入っていった。

「やれやれ、俺も早く休みたいぜ」

彼の独白は誰の耳にも届かない。

数分後には金属音が定期的に鳴り響くようになった。

「あれ？　ずいぶん暗いなあ…　って、もう夜か」

クロードが目を覚ますと、辺りは暗くなっていた。

「腹が減ったな。何か食べるもの、つと」

部屋に入り込んでいる微かな月光を頼りに居間へ出る。

置いてあったランプに火を灯し、テーブルの上を照らす。そこにはクロードのために簡単な食事が用意されてあった。

「おお、助かるな。ガイン、ありがとう」

今は奥の部屋で休んでいるだろうガインに向けて礼を言う。

クロードはそれをゆっくりと食べ、水を飲む。

「ふう、食った食った。さて、寝るか」

そして彼は自室に戻って眠りについた。

遭遇 part 4 (後書き)

お待たせしました！

今度の投稿はいつ頃になるのでしょうか (笑)

遭遇 part 5 (前書き)

お待たせしました；

今日は8月32日。

何とか期日には間に合ったようです。

遭遇 part 5

クロード、クロード……

誰かの呼ぶ声がする。俺はまだ眠いんだ、もう少し寝かせてくれよ。

クロード、クロード……

ったく、何なんだよ！

クロードはそこでようやく目を開く。

「ここは……、どこだ？」

見回すと、そこは一面白の少し眩しい世界。彼はそんなところに立っていた。

（クロード、心して聴いて下さい）

柔らかな女性の声がした。

慌てて辺りを見るが、周りには誰もいない。しかし、声は確実にこの空間から聞こえる。というより、この空間そのものから聞こえてくるような感覚だ。

「誰だっ！？ 姿を現せ！！！」

クロードは周りに向かって叫ぶと、また声が返ってきた。

（残念ながら、私に姿は存在しません。ですが、あなたが望むのであれば……）

クロードの眼前で光が人間を形作っていき、そこから金髪碧眼の女性が現れた。

「！？」

突然の展開の連続に驚くクロード。

（早速ですが本題に入ります。これから言うことを心に留めておいて下さい）

勿論クロードは納得できるはずがなく、

「質問に答えろっ！ お前は誰だっ！！」

終いには剣まで抜きそうな勢いである。

しかし、女性は全く動じず、終始平静な状態で続ける。

（残念ながらもう時間がありません。あなたは選ばれた運命の子。これより向かう旅路には様々な困難が待ち受けているでしょう。しかし、それを乗り越えて行かなければなりません。ですが、私は信じています。クロード、……なら……と、……を……る……）

女性の声は次第に小さくなっていき、途切れ途切れにしか聞こえなくなり、やがて消えた。声と同時に女性の姿も徐々に薄れていき、この空間には彼のみが取り残された。

「つたく、今のは何だったんだ……!？」

そう呟いた瞬間、身体が引つ張られる感覚がした。

「ここは……？ あれは……、また夢だったのか……？」

気が付くとクロードはベッド上にいた。

さっきのことは一体何だったのだろう。やはり何も分からない。

だが、1つだけ確信していることがある。

（これは、現実だ）

彼は疑問を口にしたが、心では分かっていた。理由は無い。そう思ったのは、理屈ではなく直感だ。誰かに話せば馬鹿にされるかもしれないが、クロードは確信を持っていた。

（あの女性は何を知っていて、何を俺に伝えたかったんだ？ 彼女は最後に何を言っていたんだ？）

「つたく、もう何なんだよ!？ 運命の子とか意味分かんねえし!」

無性に苛立ち、途中からは不満が口に出ていた。

「あゝ、やめだ、やめ」

あれこれとを考えても仕方がない。いずれ分かることだろう。今すべきことは、前に進み記憶を取り戻すことだ。

さっきの出来事はとりあえずは心の奥に留めておくだけにしよう。この記憶が役立つときは、今ではない。

そして、そろそろ行かなくては。

いつまでもここに在る訳にはいかない。確かにこの村で新しい生

き方を選択することもできるだろう。

（だが、それは俺の生き方ではない。それに、この現状から目を背けてはならない）

失った記憶の手掛かりはゼロに等しい。左右どちらに行けばいいか、それすらも分からない。

そのため、とりあえずはこの国の首都へ行こうかと思っている。

場所はガインに地図を見せてもらったときに覚えておいた。そこで様々な情報も入ってくるだろう。

資金はこの宝石を売れば当面は持つはずだ。足りなくなったら働き口を見つければ良い。

午後は旅支度をしよう。具体的に何を用意すれば良いのかは分からないが、これ以上ガインに迷惑をかける訳にはいかない。

出発は明後日、朝には出発したい。長い旅になるだろうが、手掛かりを1つ1つ拾い集めていこう。

遭遇 part 5 (後書き)

ごめんなさい、前書きで調子に乗りました……
今日は9月1日。

少し過ぎてしまいましたね。

次はなるべく早めに投稿したいと考えています。
それでは！

旅立ち part 1 (前書き)

書きためていたモノが1つ残っていました。

推敲はあまりしていないので出来はいまいちですが、とりあえず上げておきます。

遂に第3章、これからこの世界を旅します！

今回は少し短め。

旅立ち part 1

クロードは様々な店を回り、これからの旅に必要なと思われる最低限の装備を整えた。資金は持っていた宝石を換金して使った。宝石1つだけで随分な額になり、お釣りまで出た。

夕方には済ませて、ガイン宅へ戻る。剣の手入れもしてもらった。後は明日になるのを待つだけだ。

一人旅は少し寂しいが、仕方ない。これはクロードのみが抱える問題なのだから。親しくなったとはいえ、不用意にガインを巻き込む訳にはいかない。

ガインにバレないように、荷物を部屋へと運ぶ。そして、見つからないようにベッドの下にそっと隠す。

足りないものが出てくれば、これから向かうこの国の首都『メリアーヌ』で補充すれば良い。

出来れば馬も欲しいのだが、先が見えないのでできるだけ出費を抑えたい。それに加え、彼自身も馬に乗れるかという不安があるので、諦めた。荷物も多くはないので、まだ問題はないだろう。

様々なことがあったが、明日は出発だ。

出立の日、クロードは早朝に起きた。昨夜は多少緊張していたが、ぐっすりと眠れた。

ガインには悪いが、黙って出て行くことにしよう。これ以上迷惑を掛ける訳にはいかない。黙ってとは言っても、この旨を伝える手紙は残していくつもりだ。

荷物が入った袋を肩に担ぎ、二振りの剣も携える。部屋を見回し、忘れ物が無いか確認すると共に、世話になった部屋に感謝する。

(今まで、ありがとう)

扉を開け、居間に出る。しかし、そこにはいつもと変わらない風

景があった。

「!？」

——つまり、ガインがいた。いつものように朝食を用意して。

「おいおい、こんな朝早くからどうしたんだ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべるガイン。

「なっ、どうして……？」

困惑したクロードはやつとのことでそれだけを口にする。

「どうしてかって？ まあ俺を甘く見るなってことだ」

（まさか、気付かれていたのか……!?!）

クロードの出立を予測していたのだろうか。ガインは彼の予想以上に鋭い人物のようだ。

「俺に止める権利は無いが、一言相談して欲しかったなあ。おかげで、俺も同行することを伝えられなかったじゃないか」

そう愚痴っぽくこぼす。

待てよ、今何て言った？ 同行するって……

「そういうことだから、また宜しくな」

茫然と立ち尽くすクロードにそう言って、片手を挙げる。

「だが……、俺の旅は長くなるだろう。何を目指せば良いかも分からないし、命が危険になる可能性も否定できない。それでも構わないのか？」

しかしクロードはガインとは対照的に真剣な面持ちで尋ねた。軽い気持ちで同行するつもりなら、たとえ恩人でもそれを受け入れる訳にはいかない。

「俺にも覚悟はできている。もう決めたんだ。やはり俺には平穏な生活は向いていない。あの頃のように闘い続けよう」

ガインはそんな彼の気持ちを汲み取ったかのようにクロードをしっかりと見据えて言った。

クロードもガインの覚悟を感じとり、最後に再確認。

「本当にそれで構わないんだな？」

「くだいな、俺だって並大抵の決意じゃない。それともついて来て

欲しくないと？」

それを聞き、一転して声を弾ませる。

「そんなはずはない、改めてよろしく頼む！」

「こっちこそな！」

こうして、ガインが仲間になった。

この世界のことをまだほとんど知らないクロードにとって、ガイ
ンの同行は戦力面・精神面・知識面その他様々なことにおいてとて
もありがたい。

そして、朝食を終えた2人は町を出た。

旅立ち part 1 (後書き)

いよいよ旅が始まりました！

今はまだ男2人の旅ですが、数話先で華(?)を加える予定ですの
で(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9026r/>

Lost Memories～失われし記憶～

2012年1月13日11時48分発行